都藝泥布

京都地名研究会　会報　第 54 号

平成 28 年 6 月 25 日発行

題字「つぎねふ」（山城の枕詞）

揮毫　吉田 金彦(名誉会長)

2016 年度総会・講演会報告

さる 4 月 24 日（日）龍谷大学大宮学舎において、2016 年度（第 15 回）の総会並びに講演会が開催された。講演会では、川嶋將生氏に「上杉本洛中洛外図屏風と地名」、井上満郎氏には「京都とは何か」という演題でそれぞれお話しいただいた。

参加者　会員 39 名、一般 21 名

計　60 名

会費（単位　円）

2016/4/24	一般会員	14 名	42,000
総会・講演会	新規会員	1 名	3,000
	理事会員	12 名	60,000
	理事追加会費	2 名	4,000
	非会員 300	21 名	6,300
		計	115,300

書籍販売

2016/4/24	『地名探究』	2	1,000
総会・講演会	『地名探究』	3	3,000
	『京都の地名検証』	1	2,500
	植村様寄贈本	2	1,000
			7,500

第 15 回総会〈議事録〉

議題（以下決定事項を記す）

①2015 年度事業報告（『地名探究』14 号参照）

②2015 年度決算報告

会計監査報告　（以上、後掲表参照）

③2016 年度体制について

顧問　逝去　上田正昭氏

理事　新任　天野太郎氏

常任理事　逝去　山嵜泰正氏

退任　天野太郎氏　齋藤幸雄氏

新任　酒井源弘氏　中島正氏

会計監査　小寺慶昭氏　小西宏之氏

以上の他は前年度に同じ

上田正昭氏と山嵜泰正氏の長年にわたるご協力に感謝するとともに、心よりご冥福をお祈りします

④2016 年度事業計画

●総会・講演会

●地名フォーラム

第 43 回　7 月 24 日（日）龍谷大学大宮学舎

研究発表　大野克二氏、酒井源弘氏、山口均氏

第 44 回 10 月 23 日（日）アスピア山城（木津川市）

講演　小寺慶昭氏

研究発表　中島正氏　中津川敬朗氏

第 45 回　2017 年 1 月 22 日（日）

龍谷大学大宮学舎（予定）

研究発表　未定

●地名ウォーク

第 5 回　7 月 10 日（日）13:30～16:30

「長岡宮跡の地名を歩く」

案内人（予定）松崎 俊郎氏　中尾 秀正氏

コース：長岡宮朝堂院公園案内所前（集合）

→長岡宮築地跡→長岡宮内裏跡

→長岡宮大極殿・小安殿跡

→向日神社・元稲荷古墳

→向日市文化資料館

→阪急東向日駅（解散）

【歩程　約 4ｋｍ】

●出版　『地名探究』15 号　2017 年 4 月刊行

「都芸泥布」第 54、55、56、57 号刊行予定

⑤　2016 年度予算案審議（後掲表の通り決定）

⑥　その他

2015年度決算(案)

収入				支出			
費目	予算	決算	備考	費目	予算	決算	備考
一般会員・家族会員会費	360,000	248,000	(未納分および次年度分の払込含む)	事務費	50,000	17,321	文具、プリンターインク代、振込手数料他
理事・賛助会員会費	150,000	168,000	(未納分および次年度分の払込含む)	通信費	100,000	91,763	切手、会報等の発送費他
雑収入	24,000	24,900	一般参加者83名	会誌制作費	150,000	162,000	『地名探究14号』発行費
書籍販売	50,000	52,000		事務局費	100,000	100,000	事務局、会計、編集、HP作成
寄付	-	2,500		講師謝礼等	100,000	120,000	講演、地名ウォーク講師料、御車代
前年度繰越	149,549	149,549		交通費	100,000	55,580	交通費
				特別会計繰り入れ	-	-	20周年事業準備金
				予備費	133,549	-	
				次年度繰越	-	98,285	
計	733,549	644,949		計	733,549	644,949	

2016年　4月　2日　以上の通り、決算報告を致します。

2015年度特別会計(20周年事業準備金)

2014年度までの累計	881,383	内、利子181円を含む
2015年度末繰り入れ	-	
計	881,383	

会計　忠 住　佳 織　(印略)

2016年　4月　2日　監査の結果、相違なく決算処理がなされていることを認めます。

会計監査　久 保 田　孝 夫 (印略)

会計監査　小 寺　慶 昭　(印略)

2016年度予算(案)

収入			支出		
費目	予算	備考	費目	予算	備考
一般会員・家族会員会費	300,000	100名見込み	事務費	30,000	文具、ﾌﾟﾘﾝﾀｰｲﾝｸ代等
理事・賛助会員会費	150,000	30名見込み	通信費	100,000	会報等の発送費他
雑収入(資料代他)	24,000	一般参加者80名見込み	会誌制作費	170,000	『地名探究15号』発行費
書籍販売	50,000	『京都の地名検証』『地名探究』販売	事務局費	100,000	事務局、会計、編集、HP管理
前年度繰越	98,285		講師謝礼等	140,000	講演、地名ウォーク講師料、御車代
			交通費	50,000	山城会場他
			特別会計繰り入れ	0	20周年事業準備金
			予備費	32,285	雑費他
計	622,285		計	622,285	

講演１（要旨）

上杉本洛中洛外図屏風と町名

川嶋　將生氏（立命館大学名誉教授）

上杉本洛中洛外図屏風の景観年代についは、1988年に刊行された今谷明氏著『京都・一五四七年ー描かれた中世都市ー』によって、 書名にあるような時代のものと問題提起された。残念ながらその問題提起は支持されるには至らなかったが、しかし本屏風に描かれた建築物や地名は、かなりの程度、実景を反映したものであることも判明した。

一方、上杉本洛中洛外図屏風には、130 余所の建物名や地名の墨書が確認される。その墨書は 16 世紀後半の筆跡と判断してよいもので、つまり屏風が描かれた時期と同時か、あるいはさほど時をおかず書かれたものと判断できるものである。

以上のことを前提として、本屏風の右隻３～４扇に描かれた医師竹田法印定珪の邸宅と東洞院錦小路上る「元竹田町」との関係、さらには墨書はないが、米俵を背負った馬の姿などから、かつて京都の米穀流通センターの役割を果たしていた米場の存在と、烏丸三条上る「場之町」との関係などを史料に基づいて裏付け、大鳥壽子氏の『医師と文芸ー室町の医師竹田定盛ー』（和泉書院、2013）、瀬田勝哉氏の「馬二題ー上杉本『洛中洛外図』の一齣」（同氏著『洛中洛外の群像』所収、平凡社、1994）などを参照しながら紹介した。

さらには、近年発見された扇面画「諏訪の神事」（16 世紀作）を紹介しながら、14 世紀の人で室町幕府奉行人などを勤めた諏訪円忠の活躍とともに、諏訪信仰の京都への浸透と東洞院蛸薬師通り上る御射山町（18 世紀半ば頃までは諏訪町）との関係を述べた。江戸時代の各種京都案内記によると、御射山町に鎮座した諏訪社では７月 26・27 日に祭礼が執り行われていたが、流鏑馬を描いた扇面画の「諏訪の神事」は、それとは別に、武家によって紫野馬場催された行事で、相国寺の僧侶の記録『蔭涼軒日録』には、丹波国人で細川氏内衆でもあった上原氏によって興行されたことが記されている。ちなみに上原氏は諏訪神氏の一族である。

最後に 15 世紀の史料「蓮如上人子守歌」のなかに登場する「地獄ガ辻子・加世ガ辻子」の二つの遊所をとりあげ、また上杉本洛中洛外図屏風や七十一番職人歌合に描かれた遊所を紹介して、遊所を訪れる際の男性の風俗などにも言及した。なお「地獄ガ辻子・加世ガ辻子」については、左京の六条から七条にかけて存在したことが推定されるだけで、現在の町名との関連は不明である。

（川嶋　將生氏記）

講演２（要旨）

「京都」とは何か

井上　満郎氏（京都産業大学名誉教授）
（京都歴史資料館館長）
（本会理事）

（井上　満郎氏）

「京都」は今の京都のことではない。漢語であって、特定の場所・地域を示す用語・地名ではなかった。

古代日本の文献で「京都」と書かれたとき、その読みは「ミヤコ」で、というよりも日本語のミヤコを漢字で表わすのに漢語の「京都」という文字を借りた。ミヤは大王・天皇の居所であり、その居所のある場所、というのがミヤコという言葉の原義である。

日本では「ミヤコ」が首都の意味で用いられたが、普通には日本語「ミヤコ」は「京」一字で表現された。土佐国から帰京した紀貫之(きのつらゆき)は海路をとって土佐から京都に向かうが、淀川(よどがわ)をさかのぼって「山崎(やまざき)」で下船した。川舟に乗り換えないで淀川を遡上したらしく、そこから「京へ」車を取りに行かせた。その表現は「京」であって、「京都」ではない。

平安京が宮都になって以後、「京都」という表現はどのように変化したのか。たとえば貞観七年（八六五）、地方から都に動員されていた「衛士(えじ)・仕丁(じちょう)」らが「愁訴(しゅうそ)」した。その文言のなかに自分たちは「郷国を遠辞し、京都に苦役」していると訴えた。これは彼らが訴え出た公式の文書であり、そこに「京都」が見える。原文では「遠辞郷国、苦役京都」となるように、この「京都」という文言は対句にするために調えられたものであって、意味は「京」一時で通るのだが、「遠辞郷国、苦役京」では漢文の文章として成立しないがための修辞なのだ。したがってこれをもって貞観七年に、「京都」が京都を指す固有名詞になっている証拠とはなしがたい。

では「京都」が「きょうと」と読まれ、地名となるのはいつなのか。その点で注意される史料に滋賀県大津市の石山寺に伝わる聖教(しょうぎょう)がある。これそのものは単なる仏教経典なのだが、その「倶舎(くしゃ)論記」の奥書(おくがき)に「保延元年七月廿八日於京都宮処故入道大相国旧居点了」とある。ここは「きょうとみやこ」ないしは「きょうとのみやこ」と読んだとしか考えられない。すなわち保延元年（一一三五）頃に、「京都」は京都のことを指す固有名詞になっていったと考えてよいだろう。

地名「京都」を成立させた背景、原因は何なのか。やはりその背後にある社会の変化が注目されねばならない。錦小路・綾小路などの商品名道路など、暮らしのなかで成立してきたのである。「京都」もこうした市民生活の全面的展開とともに固有名詞になったのであり、京都に暮らす市民たちが生活のなかから作りだしたものだということが見逃されてはならない。

（井上　満郎氏記）

京都地名研究会

第 43 回地名フォーラム（一般公開）

日時：　2016 年 7 月 24 日（日）

午後 1 時 30 分から

会場：　龍谷大学大宮学舎・清和館三階大ホール

参加費（資料代）会員無料一般（非会員）300 円

研究発表

1 大野克二の地名検証シリーズ

「京都市域の主要地名検証」

大野　克二氏　（本会常任理事）

2 「私の生まれ育った『紀伊郡伏見郷の歴史』」

～　不死身の伏見　そこには大池があった

酒井　源弘氏　（本会常任理事）

3 「プロジェクトワーク『日本の地名』実践報告」

山口　均氏（本会常任理事）

終了後、懇親会を予定（会費 4000 円程度）

●発表第一

タイトル

京都市域の主要地名検証

キーワード

京都市域の下記主要地の地名は日本語の上代の言語でその意訳が解明できうる。

鴨川、紫野、花園、嵯峨野、宇多野、先斗町、愛宕山、比叡山、比良山、琵琶湖

これらの地名の意味をおおむね解明することにより、文字・漢字伝来以前の約１５００年以前のこの地域の文化分布が判明できるものと考えます。そして、我々はそれらを土台に日本の次なる課題に思索を向けねばならない、次世代のためにも。

略歴

京都市生まれ

昭和 45 年　海外向け商社東西海外通称㈱勤務の後

昭和 50 年　海外向け航空券販売会社㈱コスモトレイド社設立　代表に就任

平成 7 年　㈱コスモトラベランド社に称号変更

平成 20 年　京都旅倶楽部株式会社に称号変更

現在に至る

約 40 年間海外旅行業分野で活動。この経験を生かし世界の地名の探究を志す。

●発表第二

タイトル

「私の生まれ育った『紀伊郡伏見郷の歴史』」

キーワード

幻の巨椋池　日本書紀に見る伏見　くれたけの里　神々の宿る地　みやびの伏見　動乱の中で伏見の歴史　三つの伏見城　倒幕の舞台　不死身の伏見

略歴

1948 年　伏見区納所町生まれ

桃陵中学、桃山高校、

1971 年　立命館大学卒業後　信用金庫に勤務

宇治観光ボランティアガイドクラブ　事務局長、研修部長、総務部長等担当

京都市まちづくり塾「幕末京都ボランティアガイド」発会時の事務局長　現在組織変更して継続中

城陽市の観光ボランティアに入会

京都の観光文化を考える会「都草」歴史探訪部会南支部部会長

京都散策愛好入会　修学旅行生を中心に京都を案内

世界人権センター　人権ガイド登録８期生

伏見観光ボランティアガイド（今年度発会予定）登録

●発表第三

タイトル

「プロジェクトワーク『日本の地名』実践報告」

キーワード

日頃より「地名教育」に模索を重ねていたが、この度、現任校において総合的な学習(１単位)を頂き、高校生対象の日本の地名を１年にわたり学習実践した。今回はその内容と問題点、今後の「地名学」についてのあり方について報告します。

略歴

1954 年　名古屋市に生まれる

1977 年　皇學館大学文学部卒業

1985 年　享栄学園栄徳高等学校教諭

2001 年　地名研究会あいち発足　代表

子供たちの地名教室開催

2011 年　同会脱会

2014 年　大阪桐蔭中学校高等学校客員講師

京都地名研究会・海の熊野地名研究会

加越能地名の会会員

兵庫県宝塚市在住

龍谷大学大宮学舎（キャンパス）案内図

☆予告☆　第 44 回地名フォーラム　★

2016 年 10 月 23 日（日）午後 2 時～5 時

会場　アスピア山城

（木津川市山城総合文化センター）

木津川市山城町平尾前田 24 番地

講演　　小寺慶昭氏

研究発表　　中島正氏

中津川敬朗氏

地名随想

北山の山名（３）

小寺　慶昭氏(本会常任理事)

皆子山(972m）は、今西錦司氏ら旧制第三高等学校山岳部の部員達によって、「皆子谷を詰めた所にある山頂」の意味で命名されたことはよく知られている(1923 年)。久多のフカンド山(854m)や美山のホサビ山(750m)も、それぞれの谷名からの命名である。花脊の西に聳える雲取山(911m)も、二ノ谷を詰めた所に山頂があり、二ノ谷山とも言われている。このように、谷に因む山名が北山北部に多いことは、今まで紹介してきたとおりである。

千谷山(645m）は、「せんだんやま」であり、「谷」を「ダン」と読ませている。掛橋谷山（766m）も、一般には「かけはしだにやま」とされるが、地元では「かやんだん」と呼び、これも「ダン」と読ませている。「谷」を「ダン(タン)」と読むのは珍しいことではなく、北アルプスの名峰・剣岳の平蔵谷(へいぞうたん)は特に有名である。

「ダン(タン)」は「段」とも表記できる。そこで問題となるのが、国土地理院の二万五千分の一の地形図「中」に記された佐々里の「ハナノ谷段山」(704m)である。「段」が「谷」なら「ハナノ谷谷山」となり、重複してしまう。柴田昭彦氏(前出)は「明らかな誤り」とし、「ハナノ木段山」が正しいとする。内田嘉弘氏も『京都丹波の山(下)』で「ハナノ木段山」と記し、北山クラブの『北山百山』でも「花ノ木段」としている。昭文社の登山地図「京都北山」も「ハナノ木段山」説を採っている。

おそらく、柴田氏の指摘は正しく、国土地理院による誤記だと思われるが、問題は残る。昭文社の地図で、同山のすぐ北側に「大段谷山」(795m)がある。『日本分県地図地名総覧』(人文社)ではこの山名を「一の谷山」としているから、「大段(大きな谷)＝一ノ谷」と考えてよさそうである。となると、これも「大段谷山＝大谷谷山」となってしまう。

朽木の雲洞谷山(622m）は、一般に「うとだにやま」とされているが(山と渓谷社『滋賀県の山』ほか)、地元の人には通じなかった。よく聞くと、「ウドダン(雲洞谷)だ」と言う。千谷山も地元では「センダン」と呼ばれているし、大段谷山も「オオダン」である。京北町小塩のババダン(677m)は、馬場谷の奥にある山という意味であろうが、あえて「ババダン山(馬場谷山)」とは言わない。

となると、「○谷山」と、わざわざ「山」を付けるのは「余所者」による命名の可能性が出てくるのであ

り、地元では谷名そのものだけで山名をも表してきたことにならないだろうか。　　(つづく)

京都地名研究会主催

第５回京都地名ウォーク

「長岡宮跡の地名」を歩く　一般公開

延暦３年（784 年）に平城京から遷都後、わずか 10 年で廃都に追い込まれたため長岡京は、幻の都と呼ばれました。その実相の解明は、「大極殿」「荒内」「嶋坂」など、現存する地名を手がかりにして始められたのです。

今年は長岡宮発掘調査に大きな功績を残された中山修一先生の生誕 100 年の記念すべき年にあたります。

発掘成果を交えながら、長岡宮関連地名の土地をたどります。どなたでも参加しやすい距離です。史跡をじっくりと巡りたい方には特にお勧めです。

日時：2016 年７月 10 日（日）13:30～16:30
　　雨天決行

集合　長岡宮朝堂院公園案内所前
　　（阪急西向日駅西口から北へ 50m）

案内　松崎 俊郎氏
　　（公財　向日市埋蔵文化財センター職員）
　　中尾 秀正氏
　　（元長岡京市教育委員会職員）

コース　長岡宮朝堂院公園案内所前（集合）→
　　長岡宮築地跡→長岡宮内裏跡→
　　長岡宮大極殿・小安殿跡→
　　向日神社・元稲荷古墳→向日市文化資料館
　　→阪急東向日駅（解散）【歩程約４ｋｍ】

参加料　１人　500 円（資料及び保険代含む）
　　当日徴収します

《問い合わせ先》
大野 克二氏（京都地名研究会常任理事）

○●受贈図書及び資料●○

◇会報「IGATENIA」2016 年３月号、４月号
「いが地名考」（「読売新聞・伊賀版」に連載）
　280 回ー292 回（2016 年１月ー４月分）
その他：伊賀の國地名研究会講演会の講演資料三講演分、冊子「芭蕉翁の肖像」（資料集）、「2016 年度研究会年間予定のご案内」など　以上、伊賀の國地名研究会

◇「ニュースレター熊本之地名」
第 173・174・175 号（平成 28 年３月ー５月刊）
熊本地名研究会発行

◇『民俗文化』第 929・630 号
　（2016 年２月、３月発刊）　滋賀民俗学会発行

◇『地方史情報』128 号（2016 年３月刊）
「岩田書院・図書目録」（2016 版）
　以上、岩田書院刊

◇『地名』第 43 号（2016 年５月 22 日刊）
宮城県地名研究会刊行の「研究会誌」。

◇『丹波綾部の中筋歴史散歩』
（中筋歴史散歩編集委　員会・編集長四方晴向氏）
「中筋のおもしろ地名」（平地篇・山地篇）
中筋資料委員会が公民館「館報」に連載された、「地名考」。以上、四方晴向氏からの寄贈。

◇ 岡田　功著『北陸から東海道へ』
（2016 年５月 14 日発刊）
姫路文章表現研究会を主宰する岡田功氏の紀行　　文。旅日記シリーズで第十一冊目である。

（お送りくださった関係機関に感謝いたします）

□　会員出版物等・紹介　□

○中井幸比古『西賀茂大将軍神社とその祭礼行事』（監修・今原嘉麻呂、平成 28 年３月 10 日発行）書名通り、神社及び祭礼について、豊富な資料について考察され、まとめられたもの。全国的に見られる「大将軍社、大将軍信仰」に関する詳しい考察もなされている。
（A４版・122 頁・糺書房）

○綱本逸雄著『京都三山石仏・石碑事典』
（勉誠出版・2016 年４月 20 日発行、A5 版 459 頁。5200 円＋税）
著者の二十数年に渡る「受け継がれてきた〈小さな歴史遺産〉を見つめ直す旅」によって調査収集されてきた膨大なデータをまとめ上げられた労作。歴史古道に残る石仏・石碑・道標を多数の図版を用い、その来歴を詳細に検証している。

○「天のかけはし」第４号
古代丹波歴史研究所（所長・伴とし子）発行
（2016 年５月１日刊、丹後一宮籠神社内）

○中島正「高句麗移民の痕跡」（古代環東海交流史ー『高句麗と倭』（明石書店発行）所収、2015・7・20 刊）

○中島正「南山城の古代寺院」（新川登亀男編『仏教文明の転回と表現』（勉誠出版刊）所収、2015・3・20 刊）

○奥田貞人『「丹後王国論」と豊受大御神』

（松香堂書店、2016・5・26 刊）

丹後王国論とは、丹後の渡来文化、丹後王国とヤマト政権、伊勢神宮の成立と丹後王国についてまとめられたもの。

お願い　この欄への会員からの情報が不足しています。会員皆さんの情報、お寄せください。

会費納入の依頼

今年度、または今年度含む過年度の会費が未納の方は納入方、よろしくお願いします。

納入状況のお問い合わせは事務局まで。

□　会員勧誘にご協力を□

随時新入会員を募集しています。周りの方への入会のお勧め、皆様のご協力、よろしくお願いします。

原稿募集

会報「都藝泥布」締め切り：随時

＊但し、次号 55 号は、2016 年 8 月末日締切。

発行は「総会」「地名フォーラム」の一ヶ月前

会誌『地名探究』締め切り：11 月末

翌年 4 月刊行

◇ご寄稿の際には、会誌『地名探究』13 号の「原稿募集要項」をご参照ください。

京都地名研究会 原稿募集要項　（抄）

京都地名研究会は下記の要領で「都藝泥布」の原稿を募集しています。詳細につきましては、京都地名研究会事務局までお問い合わせください。

1．投稿の資格

（1）本研究会会員および本研究会会員との共著者

（2）本研究会が依頼した、または認めた者

2．投稿原稿の内容

（1）投稿原稿は未発表のもので、テーマは地名に関するものであれば自由。

（2）その他（本研究会が認めたもの）

投稿規定 ―会報「都藝泥布（つぎねふ）」

1　投稿原稿は次のいずれかとする

①随筆（連載含む）②会員消息③新刊紹介④書評⑤地名研究分野の動向など。

2　原稿締め切り　随時

3　原稿は完全原稿とし、用紙サイズはＡ４判を使用、横書きとする。

4　ただし、締め切り日、ページ数については制限を設けないが、提出した応募原稿の形式や、採否を含め、「都藝泥布」編集委員会の判断にゆだねる。採用の如何を問わず、応募原稿類は写真・図版をも含めて一切返却しない。

5　会報の性質上長文は避ける。

6　応募原稿の提出先：事務局

京都地名研究会への入会案内	
千年の都、京都。ここを起点として近畿から国の内外に及び地名を広く細かく蒐集し、比較調査して、地名を学ぶ学会です。地名は歴史の鏡であり、文化を盛る器です。私たちの暮らしのもとにある地名に目を向けて、日本の文化と歴史認識をいっそう深め、地域の知的活性化に役立ちたいと念じます。年齢、職業などの如何を問わず、いつでも、どなたでも、地名文化に関心をもたれる方々のご参加を歓迎し、ご協力もお願いします。入会金不要。	
年会費	3000 円
賛助会員・理事	5000 円
家族会員	1000 円

事務局

お問い合わせは下記京都地名研究会事務局へ